アイヌ語の地名

文責：後藤義治（北海道エスペラント連盟員）　（横山が一部関与）

アイヌ語地名についてはいろいろな人が取り組んでおり、ここで紹介した解釈について異論がある場合もありますので、その点ご了解下さい。

北海道の地名はほとんどがアイヌ語に由来する。他に藩が家臣を送り込んだもの（伊達、白石、佐倉、角田、鶴岡）や開拓入植社（者）の名を取ったもの（相馬、福島、宮城、秋田、鳥取）、後になって地方自治体が区画整理をして付けたものなどがある。今回はアイヌ語に由来する名を海岸線に沿って北海道をひと回りして見たい。

まずは札幌今有力な説は３つあるが、sat-poro-pet（乾いた・大きい・川）だ。札幌を一望するには藻岩山（531m）に登ればよい。藻岩山は mo-iwa（小さい・岩山）だが、もともとは北側にある円山が mo-iwa で藻岩山は inkar-us-pe（眺める・いつもする・所）と言っていたが、開拓使が間違えたようだ。札幌に次いで、運河で有名な小樽 ota-ru-nay（砂浜の・道の・川）だが、ひと昔前は札幌をしのぐ商業都市であった。西へ歩を進めると絶景、積丹 sak-kotan-pet（夏の・集落・川）、絵を描く者に取っては夏ばかりでなく春夏秋冬魅せられて止まない。ここからは舟で 100km 程南下すれば漁業の町瀬棚 seta-nay（犬・川）に至る。根拠は不明だが、ルペシペが seta（犬）と nay（川）の間に入っていたという説もある。この留辺蘂 ru-pes-pe（道・それに沿って下る・沢）は網走の常呂川と丘陵の町美瑛にもある。網走は後述するとして美瑛 piye（油っ濃い）は十勝岳から流れて来る温泉水でこの名が付いた様だ。当てた字は違うが、ビエイは帯広、釧路、本別、美幌にもある。話を進めよう。亀田半島の北部は内浦湾、別名噴火湾があり養殖漁業が盛んだ。イカ飯で有名な森は昔鬼牛別 o-ni-us-pet（川尻・木・群生する・川）と言ったが、ここは音でなく意味を取って森になった。湾の一番奥は長万部 o-samam-pet（川尻が・横になっている・川）、こちらはカニ飯で有名、対岸は今、洞爺と呼ぶが少し前までは虻田 Aputa（語源不明）と言った。
有珠山の大噴火を昨日の様に思い出す。道路・交通・建物・設備工場など大打撃を被ったが一人の死者も出さなかった世界でたったひとつ、岡田弘（北大教授）の地震予知の成功例だ。近接の昭和新山も地球の生い立ちを教えてくれる。噴火湾北側の再端部は室蘭 mo-ruerani（小さい・坂）白鳥大橋が海に美しい姿を投影し名が示すように平地に少ない。北海道で一番古い温泉町は登別温泉町 nupur-pet（水が濁っている・川）、少し北上すれば、白老 siraw-o-i（虻・群生している・所）はアイヌ文化が保存されており、住所、習慣、生活、歴史などアイヌ文化を知ることができる。

更に北東に進めば紙を中心にした工業都市 苫小牧 to-mak-oma-nay（沼・後に・ある・もの）、昔、海岸部渕が湿地帯であったからか、又はウトナイ湖の南側を言ったのだろうか。胆振地方へ入ると鵡川 Muka（語源不明）畑作・酪農地帯だ。東進すれば新冠 ni-kap（木の・皮）火の点け技、雁皮（がんび）が豊富だったのかも知れない。浦河 urar-pet（霧・川）、様似 samun-ni（倒れた・木）を超えるとえりも岬 en-rum（突き出ている・岬）だ。するどい日高山脈が海を刀で切り込むように没するところだ。本当に何もない最はての地が森進一のお蔭で全国有数の観光地の仲間入りをした。岬を廻り北に向かう道路は崖が重なる難所で古い話ではあるが、ここを通る国道 336 号線は国道工事中最もお金のかかった道路で今でも黄金道路と呼ばれている。40km 程で広尾 pira-oro（崖・所）につく。何の変哲もない漁港だが豊かな十勝管内の海側を荷っている。この pira を平に当てた地名は多く赤平 aka-pira（屋根の・崖）、糠平 noka-pira（形象の・崖）、古平 hure-pira（赤い・崖）、札幌でも豊平 tuye-pira（崩す・崖）、平岸 pira-kes（崖の・はずれ）などがある。北上すれば浦幌 urar-poro（霧・多い）は気候温暖で霧が多いから植物の生育条件に適しており畑作・酪農、林業が盛んだ。

音別 o-mu-pet（川尻が・ふさがる・川）、白糠 sirar-ka（磯・岸）を過ぎれば、釧路 Kusur(i)（語源不明）だ。釧路は漁港、石炭、紙工業の街だ。観光客は湿原と丹頂鶴がお目当て、ゴルフ場は芝がすばらしいが、遊んだあとは速やかに手入れをしておかないとアイアンは気が付いた時は銹（さび）でまっ赤という事もある。釧路から根室まで今でこそ 2 時間半で行くが、ひと昔まえは 10 時間かかった。途中、厚岸 at-ke-us-i（オヒョウの皮・むく・いつもする・所）は、アツシ（at-tus – アイヌの日常着物を織る材料 –）を作る所。今はカキの名産地、伝統ある広島のカキより味も大きさも上回る。さらに進めば、浜中 ota-noske（砂浜の・中央）、浜中は意訳で音訳は釧路近郊の大楽毛だ。

北海道の東端は根室 ni-mu-oro（木が・密生している・所）名が示すように樹木が密生しているのだが、面白いのはシベリア下しのせいだろうか海岸線は 1m にも満たないのだが陸地に向かって背が高くなりスポーツ刈りのお兄さんの頭のようだ。北上すれば別海 pet-kay（川が・折れる）、今は内陸部の酪農地帯と思っている人が多い様だが、もともとは西別川 nu-us-pet（豊漁の・いつもある・川）の河口付近で川が折れ曲がっており、鮭の産卵期は立てた棹が倒れなかったという。更に北上すると釣針のように伸びた野付半島 not-kew（顎・骨の岬）がある。そこには番屋はあるが定住者はいない。釣針の内側は尾岱沼 ota-etu（砂・鼻）といって汽水湖になっているが解放水域が 4km もあるのだから湾といった方が早い。釣針のちもとの部分が津別 tu-pet（二つの・川）二つの川は津別川と埼無異川 sakipe-moy（サクラ鱒・湾）。海でホタテが川でサクラ鱒がとれ、この地の特産になっている。その先は世界自然遺産になった知床 siri-etok（大地の・先）半島の東部が羅臼 ra-us-i（低いところ・にある・物）、西側が斜里 sar（ヨシの生えた湿原）ウトロ uturu-ci-kus-i（その間を・我々が・通る・所）へ行けば立派なホテルも温泉もある。所が羅臼では「ずい分毛深い人だなあ

と思ってよく見たら熊だった」という伝説のある“熊の湯”がある。斜里、網走 cipa-sir（幣場の・大地）、常呂 tu-kor（岬・持つ）、佐呂間 sar-oma-pet（カヤ原・にある・川）、湧別 yu-pet（温泉・川）に至るまでエゾスカシユリ、ハマナス、アッケシソウ、サンゴソウ、ミズバショウ、エンレイソウ等の群生地が原生花園を作り出している。ここでは北海道に住む我々にでもなかなか口にできない魚貝類を食べる事ができる。理由は能取湖 not-or（岬の・所）、サロマ湖、コムケ湖 komke（曲がっている）など大きな汽水湖があるからだろう。北に向かえば興部 o-u-kot-pe（川尻が・互いに・ついている・川）、枝幸 e-sa-us-i（頭を・浜に・つけている・もの）からクッチャロ湖 kutcar（喉）をひとつ飛びして宗谷岬 so-ya（岩の・岸）に行き着く。北海道の最先端だ。目を西に向ければ 25～6km 先に野寒布岬 not-sam（岬の・かたわら）、こちらはノシャップと読み、根室の納沙布はノサップと読む。稚内 yam-wakka-nay（冷たい・水の・川）、港からは礼文島 repun-sir（沖の・島）、利尻 ri-sir（高い・土地）へフェリーが通っている。稚内から南下すれば、天塩 tes-o-pet（築（やな）・多い・川）にはゆるやかに流れる天塩川とほとりに広がる原生花園を見ているうちに着く。更に南に行くと遠別 wen-pet（悪い・川）を通るがこの名も結構多い。ウェンベツ（阿寒・黒松内）、宇園別（当麻）、宇遠別（陸別）、雨煙別（栗山・幌加内）。wen（悪い）の意味は、魚が取れない、飲めない、水が濁っている、崖が多くて歩きずらいなど所によって違う。これからは南下一筋だが、まず羽幌 ha-poro-pet （引き潮・広い・川）、沖合 27km には天売島 cikere-sir（削られた・島）、焼尻 yan-ke-sir（陸に寄る・所・島）がある。北海道にはもうひとつ南西沖地震から見事に立ち直った奥尻島 ikusun-sir（向こうにある・島）だ。海岸線を走れば留萌 rur-mo-ot-pe（潮が・ないで・いつも・ある）、石狩 Iskar（語源不明）を過ぎれば終着札幌まで路線バスでも 1 時間はかからない。

この原稿は、
〇栃木義正　北海道 集落地名地理
　を底本に
〇萱野 茂　萱野茂のアイヌ語辞典
〇田村すず子　アイヌ語沙流方言辞典
〇北海道新社編　北海道大百科辞典
〇角川書店編　　日本地理辞典
〇平凡社編　　世界大百科辞典
を参考にして書いた。